

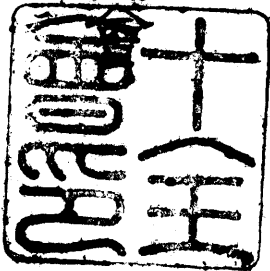
表紙, 目次, 寄書, 抄録, 漫録, 雑報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41661

明治三十一年三月三日發行

十全會雜誌

第四高等學校十全會



第五號

◎十全會雜誌第五號目次

◎原著及實驗

○鑑定ノ結果ヨリ及ス法律ノ適用

檢事

永野正路

○近視眼手術ニ就テ

高安右人

○裁判化學ノ一汎ニ就テ

櫻井小平太

○本校寄宿舎ノ食料ニ就テ

生沼曹平六

○副脾腸筋ノ異常

中西政太郎

○卵巢囊腫剔出術傍觀記事

藤井助雄

○左卵巢ヨリ發セシ纖維腫ノ一例

渡 孚貞

◎寄 書

○免疫法ノ種類ニ就テ

野田忠廣

◎抄 錄

○痲毒性膝關節炎ニ就テ

鈴木寛之助

○「ヒステリ」性假面間歇熱

○僧帽辨口狹窄ニ伴フル再歸神經痲痺

○胃中ノ「セルラック」石ノ一例

○胃患者ノ海水浴ノ作用

以上 松原三郎

◎慢 錄

○醫窓餘錄

久保輪濤

◎雜 報

○數十件

(木村教授尺牘)

術ニ過キサルオヤ乃チ斷然手術ヲ中止シ腫瘍一小部ヲ取リテ顯微鏡的驗查ノ材料ニ資シ其部及ヒ腹壁創ヲ嚴密ニ縫合シ防腐綑帶ヲ施ス時ニ午前十時五十分ヲ報ス麻醉用嚙仿ノ消費二十五ナリ

(未完)

寄 書

◎免疫法ノ種類ニ就テ

野 田 忠 廣

各種ノ傳染病殊ニ痘瘡、麻疹、猩紅熱ノ如キ發疹性病ハ吾人一回之ヲ經過セバ永年該病ニ對シテ免疫性ヲ獲ルルハ古來既ニ明ナルノ事實ニシテ虎列刺、腸窒扶私、赤痢ノ如モ亦連年同一罹病者ヲ生セシコナク、印度ノ虎列刺地方ニ於ケルモ其ノ大流行ヲ見ハ每三年ニ一回ナリト云フ、彼ノ痲病、再歸熱、肺炎、間歇熱等罹病後却テ感受性ヲ増スカ如キノ破格ナキニ非ラスト雖一般ニ多數ノ傳染病ハ一定期限、一定度ノ免疫性ヲ興フルモノタルハ其適性ト稱スルモ可ナリ、

此ノ自然的後天性免疫ノ事實ニ基キテ人工的免疫法ヲ施コシ以テ傳染病豫防上ニ應用シタルハ實ニ痘瘡接種、牛痘接種ヲ以テ嚙失トス、麻疹ノ如キモ其ノ輕症流行時ニ於テハ故意ニ健康小兒ニ感染セシタルコアリ、近世ニ至リ益々此理ヲ擴張シ、人工免疫ノ法日ニ月ニ新チ加ヘ而シテ血清治療ナル偉業吾醫界ニ生産スルニ至リ、今ヤ將ニ實扶的里、破傷風、虎列刺、腸窒扶私、肺炎、結核、赤痢、梅毒、連鎖球菌、蛇毒等ノ治療血清吾人醫家ノ匣中ニ横ラントスルノ時ニ當ツテ余

カ人工免疫法ノ種類ヲ譯出シ、茲ニ諸君ニ向ツテ報告セント欲スルハ敢テ無益ノ爲タラサルヲ信スレハナリ

人工免疫法ヲ大別シテ次ノ五種トナス

第一、自然ニ生活力衰弱シタル病原菌又ハ人工ニ衰弱セシメタル病原菌ヲ動物体ニ接種ス然ルハ動物ハ僅ニ病的症狀ヲ呈スルノミニシテ敢テ死ニ至ラス而シテ一定度ノ免疫性ヲ得「パステウール」氏始メテ此法ヲ鶏虎列刺菌及ヒ脾脫疽菌ニ就テ試ニタリ、氏ハ鶏虎列刺菌ノ久時空氣中ニ放置セラレ其毒力減弱シタルモノヲ用ヒ、又脾脫疽菌ヲ攝氏四十三度高温ニテ一定時間培養シ、其毒往ヲ減弱セシメ而シテ之ヲ感受性動物ニ接種シクリ、其他黴菌ノ毒性ヲ減弱スルノ法種々アリ例之バ培養物ヲ日光ニ暴ラシ或ハ之ニ高氣壓ヲ與ヘ、或ハ電氣ヲ通シ、或ハ石炭酸、重クロム酸加里、三格魯兒化、沃度等ノ化學的藥品ヲ加ヘ或ハ黴菌ヲシテ感受性鈍キ動物体ヲ通過セシムル等ノ如シ「パステウール」氏法トシテ有名ナル彼ノ狂犬病豫防法ハ實ニ此ニ基ス、余ハ茲ニ其大要ヲ述ヘン抑モ狂犬病々原ハ未タ發見セラレスト雖モ一ノハ微有機体タルヤ疑ヲ容レス、試ミニ病犬ヨリ新鮮ナル脊髓一小片ヲ取リテ之ヲ健康ナル犬ニ接種セハ日ヲラスシテ該病症狀ヲ呈シテ斃ルヲ以テ知ルヘシ「パステウール」氏ハ其毒性ヲ減弱センカ爲メ新鮮強毒ナル脊髓ヲ一器内ニ懸垂シ器底ニ水酸化加溜母ヲ盛りテ之ヲ乾燥セシム、然ルキハ其毒性日ト共ニ減衰ス、例之ハ一日乃至四日間(攝氏二十二度ノ温ニ於テ)乾燥セシメタルモノハ接種後七日ニシテ始メテ病症ヲ發シ、五日間ヲ經タルモノハ其症狀ヲ發スルヲ著シク遲シ十二日乃至十四日ニ至レハ全ク無害ナリ、

如此キ脊髓ノ乳劑ヲ製シ、先ツ十四日間乾燥セシメタルモノヨリ漸次新鮮ナルモノ、一瓦乃至二瓦ヲ犬ニ注入スルトキハ全ク之ヲ免疫性トナスヲ得ルノミナラス又罹病後ニ於ケル治療法トナスヲ得、現時吾人ノ行フ所謂狂犬病療法則チ是ナリ、

第二、黴菌ノ生産物ヲ注入ス、此ノ黴菌ナキ「トクシン」(毒素)ノミヲ獲シニハ黴菌培養液ヲ取り、「パスラウール、シヤムベラン」氏濾器ヲ用ヒテ濾過シ又ハ或ル減菌法ヲ施スニ在リ、抑モ多數ノ黴菌性ニ疾病ニ於テ黴菌日ヲヨリモ寧ろ其ノ生産毒素主トシテ症候ヲ呈スルハ諸君ノ知ル所ノ如シ「ルー」、「エルサン」等ノ實扶的里ニ於ケル、北里ノ破傷風ニ於ケル最モ深ク研究セラレタルモノナリ、故ニ此種ノ免疫法ハ多數ノ傳染病ニ就テ多數ノ學者ニ依テ實驗セラレタリ、「シヨオー」氏ハ脾脫疽ニ就テ、「サルモン」、及ヒ「スミス」氏ハ亞米利加脈疫ニ就テ、「シヤルソン」氏ハ緣膿菌ニ就テ、「ルー」及ビ「シヤムベラン」氏ハ惡性水腫ニ就テ、「カツ」氏ハ鶏虎列刺ニ就テ、「ポイメル」及ビ「パイベル」氏ハ室扶私ニ就テ、「クレムベレル」氏ハ肺炎ニ就テ、「ローゲル」氏ハ連鎖球菌ニ就テ「ガマレイア」氏ハ虎列刺ニ就テ各好成績ヲ得タリ、余ガ第四高等學校衛生學教室ニ於テ馬及ヒ山羊ニ虎列刺免疫法ヲ施シタルモ亦此法ニ據レリ、

第三、異種ノ黴菌若クハ其生産物ヲ注入ス、此種ノ免疫法タルヤ永續性ナラス又全身性ナラスシテ唯一時性且ツ單一機官ノ局處性保護タルニ過キス則チ自然ノ抵抗力ヲ一時増進スルニ在リ、余ハ次ニ二三ノ實例ヲ舉ケン「エムメリヒ」氏ハ丹毒連鎖球菌ヲ用ヒテ脾脫疽感染ヲ抑制シ、「パウロウスキ」氏ハ「フリードレンデル」氏肺炎菌ヲ用ヒ、「アカルド」氏ハ緣膿菌ヲ用ヒテ類似ノ成績ヲ

得、「ヒュッペ」「ウード」氏等ハ土地及ビ水中ヨリ獲タル非病的黴菌ヲ用ヒテ亦強毒脾脫疽ヲ豫防シタリ此事實ヲ説明センカ爲メ一派ノ學者ハ、**〇**微有機体ノ續抗性ヲ唱フト雖モ「エムメリヒ」氏ハ血液組織中ニ細胞化學的變化生シ此ノ動物細胞ノ間接作用ニ依テ有毒黴菌撲滅セラル、ナリト唱フ、「ブフネル」氏ノ研究モ亦前説ヲ打破スルニ足ルヘシ氏ハ異種ノ死菌ヲ用ヒテ脾脫疽ヲ抑制シ又同時ニ無菌性膿腫及ビ炎症ヲ認メタルヲ以テ之ヲ一ノ保護裝置ト認定シタリ、「ルムブ」、「クラウス」、「ブスウエル」氏等モ亦綠膿菌ノ死体ヲ用ヒテ窒扶私ヲ治療及ビ豫防シ、又「グライン」、「グベリンハイム」氏等ハ虎列刺ニ就テ、綠膿菌、大腸菌、枯草菌等ヲ用ヒテ一時性免疫生スルヲ報告セリ、

第四、**〇**黴菌体「プロテイン」ヲ注入ス、此「プロテイン」ハ蛋白質ノ一種ニシテ黴菌細胞内容ヨリ〇、

五「プロセント」加里滷汁ニ依テ若シクハ久時ノ煮沸ニ依テ抽取シ得ヘク、「ネンキー」「ブフネル」氏等曰ク此化學的物質コソ膿腫及ビ炎症ヲ發起スルモノナレ、彼ノ所謂「ヘモタクシス」作用（血球吸集作用）ハ蓋シ主トシテ此ニ存スト、

「コッホ」氏舊「テウベルクリン」ノ性質並ニ動力ハ能ク此ノ一般「プロテイン」ニ類ス、「ペーメル」氏ハ綠膿菌「プロテイン」ヲ、「ブフネル」氏ハ肺炎菌「プロテイン」及ビ「プロデイギオーズ」菌「プロテイン」ヲ「クレムベレル」氏ハ非病的黴菌「プロテイン」ヲ各結核性「モルモット」ニ注入シテ「テウベルクリン」ト同種ナル効力アルヲ証明セリ而シテ「ブフネル」氏ハ「プロテイン」作用ニ就テ次ノ如ク結論セリ、

一、「プロテイン」ヲ動物ノ皮下ニ注入スルキハ白血球吸集作用(ヘモタクシス)ヲ呈シ、之ヲ靜脈内ニ注入スルキハ全身白血球過多症(ロイコチトーゼ)ヲ呈ス、

二、人ニ注入スルキモ又局處ニ炎症ヲ呈シ、容易ニ吸収セラルヘキ(テウベルクリン)ノ如キハ結核菌所在部ニ之ヲ呈ス、

(プロテイン)ノ他、化學的藥品ニシテ、(テウベルクリン)的作用ヲ呈スルモノアリ、曰ク、(トイクリン)(植物越幾斯)(クレアチン)、(クレアチニン)、(チスチン)、(アラントイン)、(チロジン)等是ナリ、其他、「ベンツオール」、硫酸尿素、硫酸エチール尿素(アツエトイン)、(プロピラミン)、三(メチールアミン)、(アリアルアミン)、(タウリン)、(カダウエリン)、(カンタリザン)酸鹽等モ又(ループス)ニ對シテ著明ナル局處反應ヲ呈ス、

「キユーチ」氏ハ(テウベルクリン)中ヨリ(アルブモーゼ)(蛋白ノ一種)及ビ(アルブミナート)(蛋白化合物)ヲ檢出シ、而シテ(テウベルクリン)効力ノ一部ヲ此(アルブモーゼ)ニ歸セリ「マツテス」氏ノ(ドイテロアルブモーゼ)ヲ人獸ニ用ヒテ(テウベルクリン)作用ヲ實驗セルハ「キユーネ」氏所說ヲ確ムルニ足ランカ、

故ニ(テウベルクリン)ノ結核ニ及ホス効力ハ敢テ特異ナルニ非ラスシテ、一般身體組織ヲ刺戟シ、少量ニ於テハ唯病竈ノミヲ刺戟ス如此シテ自然ノ抵抗力ヲ増進セシメ、病原菌ヲ撲殺スルニ在リ、諸君ノ既ニ實驗セラレシ如ク「テウベルクリン」ノ「レプラ」「アクチノミコーゼ」ニ對シテ局處反應ヲ呈スルノ理蓋シ此ニ存ス、如此「プロライン」作用ヲ有スル「テウベルクリン」ニシテ「コツホ」氏

ノ豫期シタル如キ臨床的効果ヲ収ムルコ能ハサルノ理如何、余ハ茲ニ諸君ニ向ツテ特ニ一言セン
トス

抑モ肺結核ノ最多數ハ混合感染ニシテ「スベンゲレル」、「ペトルシキー」、「オルトネル」氏等ノ檢究
ニ從ヘハ連鎖球菌若クハ此ト肺炎双球菌トノ中間ナル「ミクロコックス、ブノイモニエー」（肺炎球
菌）混入シ爲メニ多クハ肺炎竈ヲ形成シテ結核菌ト共ニ乾酪變性ヲ促進ス而シテ肺癆増進期ニ於
ケル下痢、消耗熱、盜汗等ハ一般敗血症狀ト全ク相一致スルモノナリト、故ニ諸君此期ニ於テ血
液檢査ヲ行ヘハ多數ノ連鎖球菌、葡萄狀菌ヲ鏡檢シ得ヘシ、余モ曾テ鹿兒島病院在職中發病後十
二年ナル某末期患者ニ就テ此ノ血液變狀ヲ實驗シタルコアリ宜ナリ、「ペトルシキー」氏ノ消耗熱
ヲ目シテ敗血熱ト稱スルヤ、「スベンゲレル」氏ハ此混合感染ヲ分ツテ自働性「アクチャーフェ」及ヒ
他働性「パツシーフェ」トナス、熱アルチ自働性ト稱シ、熱ナキヲ他働性ト稱セリ、（テウベルクリ
ン）ノ無効ニシテ却テ有害ナルノ主因タルヤーニ連鎖球菌等ノ混合感染アルニ基ス、故チ以テ諸
家ノ結論ニ曰ク、「テウベルクリン」療法ハ未タ混合感染ノ合併症ナキ初期肺結核ニ行フヘク然ラ
サレハ氣候療法ニ依テ先ツ混入菌ヲ去リ、或ハ龍腦依的兒、薄荷油「メントール」ノ如キ依的兒性
防腐劑ヲ用ヒテ該菌ヲ除キ而シテ後「テウベルクリン」効力ヲ檢スヘシト、
又「テウベルクリン」ト同法ニ依リ、馬鼻疽菌ヨリ製出シタル「マレイン」、及ビ牛肺疫菌ヨリ製出
シタル「ブノイモバチリン」各前述類似ノ「プロテイン」作用ヲ有ス、
第五、非微菌的物質ヲ注入ス、「ウールドリツデ」氏ハ犢牛ノ翠丸、胸腺ヨリ製出シタル物質ヲ免

ノ血管内ニ注入シテ脾脫症ヲ豫防シタリ而シテ「プフネル」氏ハ此事實ヲ又自然抵抗力ノ増進ヲ以テ説明セントス、

「ブリーゲル」、北里、「ワツセルマン」氏等ハ胸腺浸汁中ニ諸種ノ黴菌ヲ培養シテ其ノ毒性ノ減弱ヲ實驗シ、「ボエール」氏ハ(スベルミン)ヲ用ヒテ馬鼻疽、脾脫症ヲ豫防シ又「ランデル」氏ハ肉撿酸乳劑ヲ以テ肺癆ヲ治療シ其有効ナルヲ唱フ「リヒテラル」氏ハ之ヲ贊シテ一種ノ免疫作用トナス、則チ局處的刺戟(ヘモタクシス作用)ニ依テ間質肺炎ヲ起サシメ結核竈ヲ包括シテ其物質交換ヲ廢絶シ而シテ黴菌ヲシテ自滅ニ至ラシムルモノナリト、「ペーリング」氏ハ三格魯兒化沃度及ビ過酸化水素ヲ動物体ニ注入シテ一定度ノ免疫性ノ生スルヲ報告セリ。

「フオーデル」氏ノ研究ニ從ヘハ病菌感染ノ時ハ血液ノ亞爾加里性減シ、殊ニ死ニ頻スルニ臨ンテ著シ、快復期ニ於テハ再ヒ増加ス、又人工ニ血液ノ亞爾加里性ヲ増減スルキハ病菌ニ對スル抵抗從テ増減スルモノナリト、「ライヘル」氏曰ク、家鼠ノ脾脫症ニ對シテ免疫性ナルハ蓋シ血液ノ亞爾加里性強大ナルニ因ルナラント、

「プフネル」氏ハ筋質中ノ亞爾加里蛋白、骨膠、「ヘミアルフブミン」、「植物カゼイン」、「レグミン」等ノ白血球過多症ヲ生スルヲ認メ、而シテ此ノ白血球増加ニ伴フ破壊ノ爲メニ抗毒性物質發生スヘク且ツ反應熱及ヒ亞爾加里性増加從テ生スルモノナリトハ氏ト共ニ北里、「ブリーゲル」、「ワツセルマン」氏等ノ等シク認証スル所ナリ、彼ノ局處鬱血性充血ノ骨及ヒ關節結核ニ効アルノ事實ハ此ヲ以テ説明スルヲ得ヘク、其他水浴療法、筋運動、按摩法等ノ屢々有効ナルモ亦蓋シ此理ニ基スルナ

ラン、

以上余ノ述タルハ近世諸家ノ實驗セラレタル免疫法ノ要領ナリ如何ニシテ此事實ヲ説明スヘキヤ、余ハ茲ニ現今ノ學說ニ就テ一言セン。

古來免疫學說トシテ世ニ知ラレタルモノ四アリ曰ク榮養消耗說、曰ク自毒素殘遺說、曰ク局部抵抗說、曰ク喰菌細胞說是ナリ、以上三說ハ近來ノ事實ニ適合セサルヲ以テ既ニ地下ニ埋沒セラル、「メチニコッフ」氏喰菌細胞說ニ至テハ今尙勢力ヲ有シ、是ニ據テ自然並ニ後天性免疫質ヲ説明スルヲ得ヘシ、然レモ生活細胞ヲ含有セサル血清亦殺菌作用ヲ備フルヲ以テ近時体液學說（フモターレ、テオリー）成立スルニ至レリ血清ノ抗菌作用タルヤ動物ノ種類ニ依テ異ナリ而シテ、所謂「アレクシーネ」ナル物質ノ効ニ歸ス、「アレクシーネ」ハ甚タ破壞シ易シ故ニ体外ニ於テ或ハ攝氏五十度乃至五十五度ニ於テハ既ニ其力ヲ失フ、又他ノ動物ノ「アレクシーチ」ト合スルモ破壞セラル、諸家ノ研究ニ從ヘハ「アレクシーチ」ハ白血球ヨリ産スルモノナリト試ニ白血球ヲ取りテ氷結セシムルニ白血球ハ死滅スト雖「アレクシーネ」ハ尙有効ニシテ抗菌作用ヲ存スルヲ以テ知ルヘシ、故ニ白血球ハ此ノ物質ノ運搬者ニシテ此レ多キハ抗菌力從テ増加シ動物ノ自然抵抗力ヲ増進ス。

自然的後天性、並ニ人工的後天性免疫質ニ至ツテハ「アレクシーチ」ヲ以テ説明スルコト能ハス、何トナレハ該血清ノ抗菌力ハ共通性ナラス「實扶的里血清」ハ實扶的里菌及該毒素ニ、破傷風血清ハ破傷風菌及該毒素ニ向テ作用ヲ逞フスレハナリ、「エールリヒ」氏ノ「アブリン」及「リチーン」ニ就テノ免毒試驗、「ヒサリツクス」氏ノ蛇毒ニ就テノ研究等亦然リ故ニ此種ノ免疫質ハ（狂犬病免疫血液ノ

蛇毒ニ効ヲ奏シ或ハ「アプリン」ニ抗スル如キ破格ナキニ非ラスト雖、當該菌体若クハ該毒素ニ對スル抗毒素「アンチトクシン」ナル物質ノ作用ニ歸セサルヘカラス、而シテ「ベーリング」「ルー」氏等ハ黴菌毒素ノ刺戟ニ依テ動物細胞ヨリ産出セラル、モノトナセリ、此ノ「アンチトクシン」ハ試験管内ニ於テ又ハ他ノ動物体内ニ於テ強力毒素ヲ中和、無害タラシムルノ効アリ、故ニ他動物ニ所謂他動物的免疫性ヲ附與スルコトヲ得、

今日ノ血清療法ナルモノハ則チ一ノ他動的免疫法ノ理ヲ擴張シタルモノニ外ナラス

抄 録

左の一篇は博士キユーニヒ氏か昨年七月十三日伯林外科學會に於て演せしもの、梗概なり、其説く所平々垣々敢て奇なるに非ずと雖も、痲毒性關節病の一汎を論して餘蘊あし、今左に譯載して學生諸君の講學に資す

予か得たる幾多の實驗に徴するに、急性關節病の殆ど凡ての場合に其原因果して何に基くかは知る能はざるもの、常に尿道を觀察せざる可からず、何となれば斯の如き場合の九〇、%以上は皆痲毒患者なればなり。實に屢々表はるゝ關節疾患は最も多く痲毒患者と犯し、其侵襲する關節も共に膝關節に止まらずして全身も關節中一も其攻撃を免るものあし。然れ共其滲出物中に直に「ゴノコッケン」を發見するは蓋し稀有の

◎痲毒患者に於ける關節に就て

プロフエツツル、キユーニヒ述

醫學得業士

鈴木寛之助譯

とにして、予は屢々(ストレプトコッケン)及(スタフフィロコッケン)を認め一回ハ肺炎球菌を檢

出したり。實際滲出物自家に痲毒菌と發見するとの難き、恰も結核性關節病に於て局所に結核菌と發見し難きに均し。

而して痲毒性關節炎は之れを四種に大別す。其第一類は最輕症にして主として關節の水腫を形成し、殆んど滑液と同一の液と以て満たされ、滑液嚢は殆んど全く腫脹せど。第二類は徐ろに蓄積液の潤濁を生じ、纖維素を拆出し、滑液嚢腫脹す。第三類は甚しき滑液嚢腫脹にして、加之ならず關節周圍結締織炎を發し、殊に靭帶及び腱は甚く炎症を呈し大に滲出液と増加す。第四類關節腫起甚きに對し參出物極めて少く、強劇の疼痛あり、關節の内腔甚く減少し、其大部は顆多の纖維素より形成せらるゝに至り、所謂強直性のもの之れなり。

已上の中第一類の水腫は容易に治癒するを得可く、則ち單一の穿刺によりて内容を排除し、之れ

に次くに石炭酸注入を施すを以て足れりどす。然れども他の種類に在ては斯の如く容易に治せしむる能はず、此際には關節周圍の炎症に由て惹起せられたる甚き關節強硬を呈し、十日乃至十二日を経れば著明の關節變形を生じ、膝關節は往々外輸脚(又X脚) *Genu valgum* (X-Bein), *Abductions Contractura* 或い展伸脚若くは他の變形と見るものにして、直に強硬なる癒着を成し屢々骨性強直を呈す、此強直は頗る迅速に進み、膝關節の如きは三乃至四週にして已に全く膝蓋骨不動となり骨性癒着を呈するものにして、其重症あるに従ひ愈々速かに全強直に陥るものと知るへ。期の如き骨性強直の迅速なる發生は亦膿毒症性孳婦に屢々目撃する所にして、殊に膝關節の位置適當ならざりし際に觀るものなり。其他手腕關節に於て時に危險を招くは腱にして此際化膿は腕骨より進み且之れか爲に持長す、

多くの論者は始め完全なる説明を爲し得ざるの
際、腕關節截開により只一小骨に侵かれたるの
みなることを知るへし。されど足關節は之れに比
し其關係稍善良なり、之れ此の部に在ては只に
前側のみ腱と關節と直に觸接するのみなるを以
てなり。又た手は前述の點に由り甚だ容易に不
良なる位置に強直し能ふものとす。關節周圍の
結締織炎を兼ねたる場合の治療は、全く滲出液
の多寡と且其液を穿刺す可きか或の爲す可から
ざるかとに關するものにして、手及足關節は何
れの場合にもトロイカルトを以て穿刺す、此穿
刺たる狹隘なる關節内に進入するものなるを以
て屢容易ならず。周圍の結締織炎に對し、予の
沃度丁幾を塗布す、其度は皮膚内に滲出液を生
し以て水胞と形成せるに至るへし。此治療中最
も緊要かるは關節の安靜にして屢々之れのみを
以て足るとあると忘るへからず、其速に強直に

陥らんとするものに在ては關節の牽引大に効あ
るものにして就中股關節及び膝關節に試られ、
屢々全く強直を免るゝを得。殊に牽引法を施さ
ば、レントゲンY光線の徹照を籍て、徒らに無益
の方法を行ふを避け、且つ果して關節の位置全
く正常なるや否やを確むるは頗る利益ありとす
又已に形成したる關節強直の第一の弛解の、實
に強力ある按摩によりて成効と、ナッセ氏自ら
痲毒性關節病の多の場合に試し、以て推擧すへ
きとなりと云ひり。
次に語るべきは予が行ひたる滲出物の細菌學的
検査にして、其二十七回中ゴノコッケンを發見
すると十四回、混合感染なると三回と認む。
又單一水腫の最も多數の場合には滲出物屢々褐
色を呈し大に陳舊なる血液の外觀を呈せざるも、
其豫後全く佳良あり、されど屢反腹するときは
豫後として不良ならしむるの論する迄もなし。

フォン、ノールデン氏は敗血症性ならざる痔婦及妊娠の經過中に發する種々の關節病に就て着目し、所謂慢性關節痠麻質斯なるものゝ大部分の、擧て其原因悉く痲毒に基因するものありとの意味を述べたり。

痲毒性腱鞘炎又屢々見撃するものにして、殆んど例規として關節炎と共に來り、往々孤立的に腕關節及足關節の一腱のみを犯す。滑液囊も痲

毒性病器に因て發炎すると罕れならず、アヒルノ滑液囊尤も速かに襲はる、同氏も水腫の治療として單一の安靜と數日間の軽度の壓低とを賞用し、強直にハ稍疼痛を發すへき按摩を施すと

きは其目的と達すと。女子の本病を患ふる決して男子に劣らず、予の經驗を以てするに男子の主として膝關節を侵さるゝに際し、女子の腕關節を侵さるゝこと多きは頗る奇なりキョルテ氏の說全然予の所思と同

しく、其の水腫と起せるものにして安靜とするも消退せざるものは、穿刺すべく、又他覺的著變を認めざるに反て強度の疼痛を訴ふるものは、義布斯帶を貼して固定せは速かに輕快すべく、殊に隣位の關節をも義布斯帶中に包むべしと。

只レウインの經驗は少く吾曹に反し、數多の痲毒患者中只二%を目撃せしのみなりと且つ初感痲に於て罕れに見る所なりと報せり。

畢竟治療上に在ては、安靜は其最も主要なるものにして、兼て水揚酸及び沃度加里内服は卓効あり。特にシユルレルは疼痛に對し沃剝を賞用し、一―二時間毎に小量を與へ、一日三、〇に至ると。義布斯帶は往々強直と催進するか故に頗る注意と要す、滲出物は毎常穿刺を行ひ次で昇承水洗滌若くは沃度仿留注人を以て効ありとす。

◎歇斯的里性假面間歇熱

Dr. J. Mader は常に定期的の惡寒戰慄を以て發生せる歇斯的里性假面間歇熱の一例を報告せり其記せる所に據れば千八百九十五年三月九日二十九歳の下婢來り訴ふる所はインフルエンザの症狀にして曰く八日以前より熱發し頭及頸部に於て疼痛あり且つ胸内大に苦悶を感ずと体温は翌日晝間四十度八分に昇り十一日晝三十七度六分夕三十八度二分を現はし終に再び常温に復せり而して疾患の狀態は劇烈なる惡寒戰慄の反覆して襲來するか爲め大に錯雜と極むるに至れり三月十日に於ては四回の斯る發作を來し毎常殆んと十分時にして治するを見る其の他吾人の患者の訴述により大に錯迷に纏絡せられたり即ち患者は二年以前 *Bulgaria* に在り間歇熱のため六ヶ月間空しく病院に吟呻し一年以前此地より歸來せりと然れとも患者實際に「マツリヤ」を病み

たりと云ふ最初の説述は頗る疑團なき能はず何を以てか然か云ふ即ち患者の述ふ所に由れば當時規尼涅は寸効を奏せざりしのみならず尙は常に脾臟の腫大を歎きしを以てなり然れども現今にては各發作共に体温の昇騰なくして經過するを常とす想ふに *Bulgaria* に於ける發作も又斯の如くならんか」記者嘗て發作の初期を實驗せしに患者恰かも談話の裡にあり僅に刺戟衝動せらるゝや果然忽焉として發作は來れり彼の可及的惡寒の症狀を陰蔽せんとするも而かも寒冷なるを自せり然れども須臾にして平常に復せり之より各發作は毎常熱發、灼感、發汗なくして來り殊に晝間に反覆し短少の經過を以て終れり蓋し患者は體質甚だ強壯にして毫も他に「ヒステリ」性の症候を認むること能はざりけり而して最初の「マツリヤ」は此の神經症の素因を與へたるやは茲に確言するを得ず患者は終に治療と

見るに至らずして去り查として行く所を知らず

(Wiener medic. Blätter 1897 No. 19.)

◎僧帽辨孔狹窄に伴へる再歸

神經麻痺

Dr. Norbert Ortnerは僧帽辨孔狹窄に隨住せる喉頭

再歸神經に付て、興味ある二例を公にせり今其

一例を述へんに千八百九十五年八月十二日十七

歳の一男子來る就きて其既往症を問ふに七歳時

に關節痲麻質斯及肺、肋膜の炎症疾患に犯され

之より心季動亢進し劇烈ある咳嗽を發し時々線

狀の血痰を咯出し呼吸障碍甚たしく漸次時を經

て下肢腫張し腹部膨隆し呼吸短急とあるに至れ

りとそ_レ是を診するに患者の稍々痲小にして「テ

ヒチス」の徵候を現はし皮膚及結膜の高度の黃

疸色を呈し呼吸困難著明にして端坐呼吸と營み

口唇頰部及末梢部にありては「チャノーゼ」と見

るべく四肢大に厥冷す頸部には顯著なる靜脈搏

動と現ひし右頸動脈は強烈の収縮時搏動を呈し

全頸動脈三角部に於て外見をへく亦た觸知すへ

し然れども左頸動脈の脈搏は幽微且つ小にして

容易に壓迫に由りて沈抑せらる患者僅かに嘔噎

して左側の聲帶全く麻痺すると見る肺臟は打診

上異常なきも聽診上廣く汎發性氣管枝加苔兒あ

ると認む肺の下縁は呼吸により僅かに移動す咯

痰中には心臓病細胞 Herzhelutzellen を有す呼吸

は一分時二六一三〇回を算そ心尖搏動は前腋窩

線の第七肋間に於て明かに觸知せるを得心臓濁

音部は心尖搏動と一致し右方は胸骨右縁に達し

上方は第四助骨の上縁に至る聽診上心尖部に於

て短かさ収縮時前雜音ありて第一音旺盛し収縮

時及び擴張時雜音を認む肺動脈第二音は僅かに

高聲にして三尖辨に微弱なる収縮時雜音あり大

動脈音の低くして清澄なり右側頸動脈面は左側

より強盛あり心動整然として兩側橈骨動脈の脈

搏幽微にして容易に壓抑せるを得るも整調にして心尖搏動に對し敢て著しく遅ることあり脈搏百二十四至と數ふ兩側股動脈の脈搏は橈骨動脈のものと同性質を呈す腹部より鬱血脾肝及腸胃の鬱血性加苔兒並に腹水あり腹部及下肢には高度の浮腫を彰いそも尿中病的の變化と証明すること能はず」 經過中にに心臓機能不全の症狀益々増進し兩頸脈搏の差異を認む然れども心臓の打診及聽診上の現象敢て變化なく死冥に至るまで聲帶麻痺持續し水腫及黃疸益々増劇し甚たしく羸瘦し九月十六日終に鬼籍に上れり臨床的診斷にありてハ僧帽辨狹窄及閉鎖不全、三尖瓣の關擊的閉鎖不全、全心臟(就中右心)自働的擴張、Active Diastation、大動脈弓の慢性黴菌性内膜炎、大動脈弓の續發的動脈瘤、左側再歸神經壓迫症狀を呈し恐らくは動脈瘤の壓迫により左頸動脈及兩側鎖骨下動脈起根部に於て狹窄を有

するものからん其他右側鎖骨下動脈は異常の經過を取り左側鎖骨下動脈の後側に於て大動脈弓より發起するなるへし尙ほ肺臟の褐色硬變及下腹内臟の鬱血症狀を呈す然れども此患者は左側再歸神經麻痺及ハ頸部四肢に於ける動脈の異常なる状態により之を診定せんこと甚た困難なりとす然れども若し此再歸神經麻痺に於ける凡ての有り得べき原因を除去するときは吾人は患者の幼齡にして且つ其他の症狀を欲如するにせよ此麻痺症狀を以て大動脈弓の動脈瘤及之れか爲め惹起せられたる左側下喉頭神經の壓迫に基因するものと爲さるへからず而して左側及右側頸動脈、並に兩鎖骨下動脈及股動脈の互に各脈搏の差異と呈するハ左の想像によりて推斷せざるへからず即ち右側鎖骨下動脈は異常の経路と取り左側鎖骨下動脈の後側より大動脈弓より起り爲めに大動脈弓に於けな想像的の動脈瘤は右

側頸動脈に影響なきも他の左右鎖骨下動脈及左頸動脈を壓迫狹窄し従ふて右頸動脈の非常に多量の血液を以て充盈せられ強劇なる脈波を惹起するに至りたるものなるへし

剖見的所見にありてい心臟及心嚮互に全く癒着し心臟の全容積肥大す左室擴張して筋層僅かに肥厚し暗赤色の稀薄水様の血液あり左靜脈孔殆んど二指を通し各腱索就中辨の遊離縁大に肥厚し其表面は有機化し且つ一部は粗糙一部は滑澤ある沈着物を以て被蓋せらる左房非常に擴張して弾力性に緊張し之を切開するに多量の血液流出し一部は液狀なるも一部は既に凝固せり而して其腔内は甚だ擴張し優に僅かに小なる手拳と容るゝに足る故に其の如く擴大せる左房若し充滿する時は前方及上方を壓迫し左氣管枝は房上に駕乗するに至る且つ其後壁は壓平せられ大動脈弓を圍繞返廻すに左再歸神經は限局性に殆ん

と長さ二仙迷の部位に於て著しく灰白色を變じて混濁し且つ縮窄狹小とされるを見たり而して此部分は恰も左房か其最頂點を於て左氣管枝左再歸神經及大動脈弓を壓迫する點を一致するなり其他大動脈辨は柔軟にして能く合閉し大動脈の内膜は所々肥厚して黃色を帶ふ右心亦全く肥大し三尖辨の遊離縁を於ては柔軟にして有機化せる増殖物と以て被蓋せらる其腔は三指を通すへし肺動脈辨異常なく右心其内は一部崩壞せる血塞固着せり左肺動脈直徑三仙迷右肺動脈四仙迷かり右肺動脈の細枝内は栓塞性の血塞塊を有せり故に余か動脈瘤の推斷は全く誤謬と出でたるものにして再歸神經麻痺の動脈瘤を基固せるものゝならず僧帽辨孔狹窄ニ由來せる左房の高度なる擴張のため大動脈弓を返廻圍繞する部位に於て該神經を壓迫したるを源因するなり然れとも悲哉屍体剖驗を於て脈搏の亦た異

状態を説明すること能ひざりしは甚た遺憾とす
る所なり(第二例全部省略)

此の留心を以て將た反省を以て確定したる診斷
は更お尚ほ剖見お由りて承認確安せらきたり夫
を然り加之此例や聲帶麻痺の原因上は於て縱隔
洞内臟器就中心臟の疾患おより一大光明を與へ
たるものと云ひざるへからず

(Wiener Klin. Wochenschrift 1897. No. 35)

◎胃中の「セルラック」石の一例

Dr. Voneguthは人胃に於て「セルラック」石 Schella
stein (一種の樹脂なり)の一例お逢遇し其報告
お由きは患者の五十五歳の泥細工人おして千八
百八十年代の初期お至るまでは毫も病的症狀を
覺ゆることなかりしお夫れより殊も莢豆及酸味
の食物を攝取する時は忽ち胃痛、惡心、呑酸を招
き時々帶黄色の粘液を吐出せり而かも食慾は常
に缺乏することなかりけり千八百八十年代將さ

に終らんとするに際し患者は腹部に一の腫瘍を
發見注意するに至れり多くは左肋骨弓の下部に
觸知するも然れども又下腹部の他の此處彼處に
之を知るを得たり試みも強壓を加ふる時は之を
移動せしむるを得といふ朝時劇烈の嘔吐あり又
眩暈發作を招き腹部は於ける凡ての臟置互に振
轉抑制するか如き感ありと之を診するに上腹部
に於て殆んど手拳大の腫瘍を觸る而して患者は
以前數回所々の病院を往し常も自覺的輕快を
得一二週おして彼の職業を執るを得たりと彼の
吾か病院に來りしに千八百九十六年七月初旬に
して其主として訴ふる所は全身衰弱、嘔吐及胃
部の厭感なり之を見るに彼は甚た羸瘦して容貌
老成し皮膚は汚穢黄色を呈して皺皺多し口唇帶
青色に變りて四肢厥冷し臍及胸骨の間なる肋骨
弓部に於て硬固なる鵝卵大の腫瘍を觸知し呼吸
に由りて運動せざるも僅かの區域内に移動せし

ひると得而して最初幽門部の癌腫となせる診断は直ちに其誤謬なるを知れり何となれば患者床中に安臥せば能く休息して胃痛消退し二三日後に至れば能く食物を収容するを得ればなり八月下旬彼の終に健全に復し職業に堪ゆるに至りたるに由り院を辭して去りたるも十月六日再び來り訴ふる所の苦悶同じく觀る所の状態又同じ由りて麻醉中に驗査するに硬固にして稍長形を帯へる腫瘍は上腹部に於て地平の位置と取り容易に臍の下方まで移動せしむるを得るのみならず尙ほ季助下部に於て殆んど手掌の廣さ丈け左方に推轉せしむるを得意外胃痛は又もや消失せり此に於て吾人は確實なる診断と明言すると能はざるを以て患者に試験的開腹術と同意せしめ十月十七日斷然刀を下せり終に胃を切開せるに内腔に手拳大の實質性腫瘍塊と發見し尙ほ胃の後壁に近き更らに大なる腫瘍あり此を摘去除去し

て然る后殆んど十五仙迷の胃創を縫合し腹壁を閉ちたり之より熱發なく終に治癒を得たり腫瘍は全重量六百七十瓦の石にして最初發生したるものは長十四、幅十七仙迷なるも第二者は長十四、幅二十四仙迷なり共に其主成分ハ樹脂 (Eanz (30%) にして尙ほ水分、含窒素物、澱粉、纖維等ありたり依りて後ち再び患者に尋問するに彼は千八百八十年代磁器製造所にありて勞役に服し種々の樹脂精「Lactopinitis」と飲みたることと知るに至れり而して著者は幾多の「リテラール」を採研するも只た一の例を見たるのみ即ち Friedlaender, Schellacksteine als Ursache von Hens, Berliner Wochenschrift 1881 No. 13. 之れあり此例は吐糞症を患ひて死に至りたる指物匠にして剖見に由り胃中に鵝卵大石の數個を發見し全重量九百六十瓦を算し主として「セルラック」よりあり

れり而して該患者は屢々 Tischler-Politur (主として

して樹脂を酒精に溶解したる液あり)を飲用したるなりき由之觀之酒精は胃より吸収せらるるも獨り樹脂の沈澱し凝結して斯く胃中に大石を形成するに至るなり

(Deutsche Medic. Wochenschrift. 1897 No. 26.)

◎胃患者に於ける海水浴の作用

胃患者に於ける海水浴の有効なる治癒的作用に付て Dr. E. Lindemann は精密なる検査及實驗の證據に従ひ次の結論をなせり

(一)、海洋に逗留して冷水浴を嘗まはるに胃及腸の機能と強壯旺盛とを待其源因は(甲)胃の運動性、吸収性、分泌性機能を興奮せしめ恰かも沃剝及「ザロール」の如し(乙)神經殊に消化器官を支配する神經の強健を招來す

(二)、海水浴禁忌症は多くの基質性胃疾患にして殊に胃の單純潰瘍、胃擴張及慢性胃加苔兒等の如き刺戟症狀を合併せるものなりとぞ

(三)、海水浴適應症の胃及腸の筋力衰憊及腸の弛緩無力並に胃神經症なり殊に神經性消化不真に特効あり然れども胃に於て重症の智覺性刺戟症狀あるものは然らず

(四)、最も賞賛すべきものは胃疾患の多くの場合殊に胃加苔兒と相合併したる神經性對し海水浴と共に鑛泉療法を行ふに在り

(Therap. Wochenschrift 1897 No. 16/17.)

以上五項 松原三郎 抄録

漫 錄

◎醫窓餘錄 久保輪 濤

(一) 文學の趣味

天地覆載の間萬物整然として自然の理法に従て配列す星晨天に懸り光芒爛として万象沈み、山岳地に斑し清秀天を磨して峙つ、海廣ふして究

ひるに處なく、河長ふして水常に流る、綠草露瀧
るの處銀珠光を放ち、牧笛聲遙かなるの邊青氈
野に布く、溪、幽にして水益々清く、樹繁くして
山彌々翠なり、凡そ此間に處して宇宙の秘密を
扶出し造化の微妙を穿収するもの之を文士と云
ふ蓋し文士は自然と人間との間に立ち少なくとも
社會人心の指導に任し一代の風教に裨補するど
ころるくんばあるべからず其世態人情と寫して
は精に入り微に入り天地自然と描きては神に通
し鬼に通し人として忠孝義節の心勃然として生
し隱微邪僻の念翻然として去り紛々たる塵界を
脱離して恍惚として至美至善れ神界に逍遙せし
むるへきり彼の翼々として世俗の好尚に違ひさ
らんことを欲し區々たる情實的の批評を得んこ
とに齷齪するか如き豈に文士の屑とする處あ
らむや宜し富貴に汲々たらむ貧賤に蹙々たらす
毀譽褒貶を度外に附し自修を勉め本領を失はず
其眼光無邊に透射し其氣宇乾坤に磅礴する底の
覺悟なかるべからず古往の文士が其思想の高尙
にして其氣象の清新ある或は兀々として老の將
に來らんとするを知らざるか如き或は窮乏赤貧
の中に筆を執りて苦心經營其道に忠實かりしか
如き比々皆然らざるいなし宜なる哉其一文一章
句々卓落として霸氣を帶ひ語々尾然として真情
を表はし颯蕩清逸後の讀むものをして激賞贊嘆
措く能はざらしむることや要するに文學は世人
に智識上の快感と與ふると同時に又世人の思想
と鼓舞し品格を高雅にし好尙を純傑からしむる
ものなり其眼識高遠其襟懷玲瓏死も讎す能はず
威も屈する能はず窮達も變する能はざるなり
英米獨佛か文明の中心と呼ばれ世界の強國と稱
せられ各圓球の局面に雄飛するもの固より殖産
工業の準備貿易商業の發達等は以て大原因ある
へしと雖ども而モユーゴーありゲーテありエマ

ルンンありシエーフスビヤあり壯懷を乾坤に馳せ雅志を高雲に負ひ絶壯絶美不易不朽の生命を與へたるもの亦與つて力ありしに非ざるなきを知らんや

是に出て之を見れば人の文學に依て其品格を高尙にし國は文學に依て其光輝と添ふこと燎々として火と觀るよりも明なるへし

吾輩翻て今日我國醫海の狀勢を達觀するに今や醫風の廢頽醫道の墮落日を追ふて甚たしきを加へ醫人の氣魄元氣又將に消耗せんとす抑も世の醫士たるもの其心遠大ならざるへからす幽微ならざるへからす高尙ならざるへからす誠實ならざるへからす潔白ならざるへからす而して神と同心ならざるへからざるあり世間往々利慾の爲めに腰を折り頭を低れ權豪に阿諛し勢利に趨走し左右顧眄病客の意向にのみ投せんとするものなきにわらず貧窶の病者

に遭へは乃ち傲慢無禮急を見て救はず難を聞て趣かざるものなきに非ず不語調笑して自己の淺學と隱慝し好んで他醫を訾毀排擠するものなきに非ず
仮令科學に深く治術に長するも人の患を憂とせず獨り自己の榮利を擅にせんと勉むること如斯きものは醫士の最も憎むべく最も避くべきところならん
そや我儕又未だ曾て不徳の極此に達せるものあるを見ざるあり嗚呼今日蹈々たる醫家多くは如斯きのみ臭中に居る者臭と知らず、清淨無垢の空氣は紅塵万丈の内にも求むへからざると知らば、吾輩は是等の人士に向つて望と屬するを得と、庶幾くは日夜破窓の下に吟呻し前途猶多望の同學諸君に歸せざるを得ず、蓋し天運循環の理を以て推測するときは將來斯の弊害を挽回し益々其新生面を開發するは今の學生諸君にあるを思へり也。
敢て問ふ現今全國醫學生の眼中果して能く此任務を解するものありや否吾輩情々考ふるに彼等の中

にの間々學問識見人物技量兼備のもの之無さに
あらずと雖とも多くは其從事する所の學理たる
と醫療たるとを問はず尙未だ社會に卓然樹立し
て業を遂げ名を成たるもの甚だ寥々たるに非ず
や啻に醫學上の智識に於て然るのみならず志氣
萎靡規模狹小其人物に於て殆んど觀るに足るも
のなきに非そや換言すれば物質界の進歩は寧ろ
前代に比し稍々盛運に向ひつゝありと雖ども道
徳、靈性、品格等に關しては遙に他の文明時代に
讓步せざるへからざるを奈何せん人々願ふ所望
む所仰く所皆悉く具躰有象の物質上にあり無形
の靈性界に意を留むるもの果して夫れ幾何かあ
る見よ彼等の校中にあるや試験の爲めに驅役せ
られ徒に教官の一擧一笑を恐れて遲疑環顧し偶
々上席と占むれば慢然として自得するものゝ如
く自ら豆大の小天地に踞躋せり嗚呼其心地の窄
狹ある誰か又一笑に附せざるを得んや

是時に方り獨り、鬚を落々、清新、高傑、秋月の如く、春
花の如く人として自ら濁流の外に超然たらしむ
るもの、豈斯の高尙優美の文學ならずや、
若し夫れ學窓の下孤燈の邊に坐して獨り學理の
奧妙を究めんとし偶々神疲れ氣倦む起て窓を推
せば夜已に半ならんを四顧寂寥として玲瓏たる
明月滾々として河流を輝し其流れ靜なるどころ
に燦爛たる金龍萬仞の深淵に潛むか如く其急劇
なるところは萬丈の金蛇草間に跳るか如く奇絶
妙絶なる不知不識人として苦を去り勞を忘れ清
潔高尚の念を起さしむ醫學生の文學に於ける俟
何ぞ此に異ならんや若し彼等にして時に或は紛
々たる醫學界と去て一棹月を載せて文學界に遊
はく優々其快樂勝けて言ふへからざるものあら
む或ハ斬新なる詩を吟せんも可なり或は高傑あ
る歌を唱へんも可なり況んや變化なるものは人
心をして頗る快活あらむるをや

嗚呼醫學者たるもの一度文學の趣味を解するに至らば其精神清潔純白其胸中は脱然瀟洒其品格は高優尙美而して世上の情事腐敗の汚氣心中の憂苦憤悶忽ち去りて朗々として清空洗ふか如きものあらむこれ則ち霽然たる理想的樂園に彷徨するものあらすや是れ豈又人間の最大快事と謂はばして可ならむや

底事を世に輕薄漢あり曰く文學畢竟閑人の業くれのみ前途多忙の醫學者安んぞ悠悠花鳥に戯るゝの暇あらんやと嗚呼何そ其言の淺薄にして而も趣味の卑きや凡そ物に表裏あり事に是非あり事物其用を謬まれは一として弊害あらざるはなし漫りに文學を弄ひて其業を忘るゝは其人の罪にして文學の罪には非ず渠か認めて無用の閑事業となす所以のものは即ち文學の弊を認めて其徳を認めざるによる也天下文學を弄ふの閑人固より多し而も小人閑居して不善を爲す者の更に

多きを知らざるあり况んや文學其物の神聖あるをや文學は俗事紛亂して彌貴く文學ありてこそ人文の黄金時代は望まざるへきなれ安んぞ俗快樂に眠眩し耳聾し生を浮世の濁浪に漂はばものゝ知るどころあらんや

且夫れ吾人の火天熱地紛々優々の醫學界に居る其一旦世に出つるや肉體の煩忙、精神の苦悶幾許を若し之と慰め之を醫するの具なくんば吾人の將に困憊窮死に陥りて止まんのみ。慈仁なる上帝の茲に吾人を慰藉せんか爲め最も微妙深遂なる文學の資料を賦へ以て身心と怡樂の憶界に遊はしむ吾人はこれに依りて當に身の煩悶を忘れ塵熱を脱し融然として潤達清洒の英氣と養ふへきなり。西人云そや苦憂の眠は心靈の醒めたるなりと憂苦をして安易なる夢を結びしむものは實に文學の特効也嗚呼文學なる哉吾人豈造次も文學的思想を放棄して可ならむや再呼を人は

文學に依て其品格を高尚にし、國は文學に依て其光輝を煥發す、吾人は凡ての醫學者に、向つて課業の餘技として、大に文學的趣味の涵養を望囑して、止まざるあり。

雜 報

○第七回通常會 十一月廿三日午后二時より本館學生扣所に於て第七回本會通常會を開き左乃演說ありたり

第一席裁判化學一汎に付く 櫻井教授登壇一く近時裁判化學乃進歩を述へらる (演說筆記本號にあり)。

第二席肺結核乃治療法に就く 山崎教授撫髯一番醫家乃本病に對する責任を痛論せらる (編輯乃都合により次號に掲載を)。

第三席近視眼手術的療治乃成績に付く 高安教

授は先つ近視眼及び其手術乃學理一汎を説き次く自家乃經驗せられたる手術成績を報告せらる (原著實驗乃欄を見よ)。

第四席鑑定乃結果より及ぼす法律に適用 檢事永野正路君拍手に裡に迎られく壇に登り法醫學と法律とに關係を明晰なる快辯を以く二時間餘れ長きに亘り熱心演說せらる (筆記は本號よりあり)。

右終り閉會せしは日既に西海お投りて暮色蒼然たるに頃なりき。

○校長非職 一月十六日川上校長非職を命せらる氏就職日猶ほ淺く諸般に設計未だ緒に就かざるに已に此命あり遺憾思ふ可し

○校長任命 川上校長非職に後今井教授長心得たり一か二月四日山口高等學校校長北條時敬氏本校々長に任せらる。

○第三回總會 一月十九日午后二時より野田寺

町妙典寺に於て本會第三回總會を兼ねて新年宴
本會評議員たるを諾せらる。

會を開く、高安副會長開會の辭を述べられ次て
久保拾三君起ち君か獨得の奇想を以て新年の感
を陳し雄辯滔々意氣軒昂滿場爲めに快と叫ぶこ
れより酒宴に移り鯨飲するものあり壯語するも
のあり酒酣るるに及び餘興に福引あり手品あり
妙案出て快技演せらる斯くて歡笑聲裡に散會せ
るの時は鐘聲正に十點。

○野田教授送別會 野田教授榮轉に付き其行を
壯にせんか爲め客臘二十四日午後三時より四年
級諸氏の發起おて野田寺町古今亭ふ於て送別の
宴を張る此日北風劇しく落雪霏々として樓上の
眺望轉々慘たり。

定刻お及て來り會するもの一百數十名皆愁然又
帳然として平日の快濶なるも似もやらず己おし
て坐定まれば番場友平氏發起人を代表して開會

○野田教授榮轉 教授野田忠廣氏本校を辭して
東京製苗所長に榮轉せらる余輩は舊來の懇篤あ
る薰陶を深謝し將來氏か斯道の爲めに得意の手
腕を奮われんことを望む。

○高山教授新任 野田教授の後を襲て今度高山
正雄氏本校教授となり生理衛生黴菌の三科と擔
任せらる氏は是れ第一流の新人物然も斯學熱心
の士吾人は此良師を得たるを悦ぶ因に記す氏は
野田氏に代て直に醫科第二年級長を命せられ又

内監次郎吉川砥直外數氏續々として壇に登る諸
子皆是れ胸裡滿腔の熱涙を藏するもの其言切又
其聲迫まり二時間の長さ滿場として他を顧みる
の暇なからしむ最后お野田忠廣君壇より立つ此時
既お數台の銀燭點せられて先生の身邊を照らし
洒然たる先生の姿今日は更お洒々然たり先生徐

ろに口を開て優辯縷々として陳すること數千言
然も皆是れ金石の辭あり其要又曰く

抑も學者少くとも教授たるものは三個の責任
あり即ち第一學生たらざる可らず第二研究家
たらざる可らず第三教師たらざる可らざると

是れなり余不敏と雖ども又此決心あきあわら
す彼の有名なる「ベッテンコーフェル」氏が齡
古稀を過ぎ餘命己お幾何もなき身を以てして
然も献身的大試験をあせしか如きは實に百年
儒夫をして起たしむるに足るものあり吁彼か
如きは眞乎の學者と稱すへきなり然るに今日
の學者多くは「パン」を得るの術を學ぶもの
み豈に慨すへきの至りならずや諸子にしてパ
ン學者たらんと欲せば復た言はず苟も眞正な
る學者たらんどの抱負あらい乞ふ這裡の妙諦
を忘るゝななき云々

茲に於て演壇徹せらる酒出て肴來れば先づ先生

の萬歳を三呼して後滿々たる大盃を舉げて廻歌
し終りに先生に歸す今宵の酒滴何そ夫れ苦きや
夫れより松王、吉田氏等の悲痛慘憺たる劍舞あ
りて客全く去れば夜已に深更飛雪全く晴れて寒
月皎々として空席の人を惜む、

○臨床講義場組織變更 臨床講義内科部を一部
二部に分ち消化器病傳染病全身病及び小兒科を
第二部に屬し山崎教授第一部長に高橋教授第二
部長に各囑托せられたり尙ほ眼科講義場は目下

金澤病院の増築と共に盛に成工を競ひ居れり

○和田種助氏逝く 君性沈毅として材俊邁大に
同僚の間に敬愛せらる去歲病を以て郷里能登鹿
嶋郡御祖村より歸てより君遂に起たす一月八日春
秋尙遠く前途望洋々たるの身を以て空しく黃泉
の客となる享年僅よ二十四嗚呼哀哉

○衛生新報の發刊 當市二三有志の手より衛生
新報發刊せられたり人口十萬の大市民毎日進月

歩の衛生事業を紹介するも益し無益の案にあらず同新報夫れ健康なれ

死して四壁寒寢の夜乞ふ讀一讀して徐お既往を追慕し將來に歎慮を回ふせよ

○武道大會 二月十日柔道、十一日劍術の大會を共々無聲堂お於て催されたり、丈夫冲天の氣魂ある我校の健兒は押合引合の日、丁々憂々、勝

八田外二、藤井温良、の兩氏は金澤病院内科醫員拜命、三木三郎氏お長谷川精一氏の本校内科副手に任命せらる

を争ふの日肉を躍らし腕を鳴らしして闘ふ、此兩日當市の各師範を初め文武官の參觀せられたるもの多かりき、唯吾子は獨り惜ひ醫學部に於ける壯者の此の種の氣骨あるものお乏しきを。

本田三次郎、安村順吉の兩氏は金澤病院外科醫員に佐野里吉氏の内眼科醫員に、太田他計作氏は本校解剖學副手に任命せらる由來我校卒業生に對する金澤病院醫員の給俸甚だ冷酷なり諸氏

○卒業生諸氏の方向 曾て一堂の下俱々研鑽の業を従ひし同窓同學も苦難幾年辛酸の劒嶺を踏盡し卒業の桂冠を手よし一朝手を江頭分てよ

能く斯の薄俸と忍んで學に茲に留まり汲々として勤勉せらるゝもの吾人の深く感嘆措く能はざるところとす

り疎遠疎濶杳莫冥々として互々其消息浮沈を知る由なし本誌先きも載するに舊友の動靜を以てし以て先進後進の聲咳と通せしめたり乃更に昨秋卒業生諸氏か現狀を探尋して友愛厚誼の士に介す若し夫れ春月烟を鎖して天色朦朧万籟寂

河合鷺、高岡榮、北豊吉、河村多郎の四氏は歩兵第三十五聯隊第四中隊へ、松浦啓三、岩倉兵次郎の二氏は同第三中隊へ各一年志願兵として入營せらる吾人時々途上諸氏に遭ふて先づ其顔貌黒色眼光炯々たるに驚かさることな一健全の精神

は健全の人に存す諸氏夫れ益々勉めて日本男兒の本領と盡せよ

白井精一、五堂加一郎、金森種次、辻岡律、鹽谷義一、の五氏は客臘相續ひて上京せらる

白井氏は永野病院内科に入り余暇獨乙協會にて獨乙語專修の由

近日當地の知友に賜りたる書信に曰く「目下は學士の全盛時代何ても箇ても學士でなければならぬ様に被察候學士果して價値あるや否やは不知、社會の傾向無致方候昨年大學を飛び出た様な連中より外吾々の學校へ來手のあきを以ても御察し可被下候吾々の僅に身と容れる場處も乏しく精々おて保險會社位の事お候一時の憤慨に不堪再び大學へ踏み直さんとも考へ候へ其實際事情不許思ひ止りて云々又同氏より小川教授に宛たる書簡の一節に「小子着京後先づ當地の大に買ひかふりなりしに驚き入候以後上京せらる

諸氏は充分の御注意有之度云々と好箇の鑑戒と云ふへし吾曹又豈此氣象なくして可ならむや金森五堂二氏は一月上旬より護國生命保險會社診查醫拜命、辻岡金森兩氏未だ留學中の由吾人は諸氏か速に社會に雄飛せむことを渴望するものなり

藤岡勝治氏は歸郷後賜望扶斯に罹り久しく病褥に呻吟せられしか近信によれば病氣殆んど全癒陽春三月を期し開業に就事せらると君の敏才に加ふるに君の學識を以てす聲譽噴々期せずして待つべきのみ、曾て人に語て云ふ家言の事情已むを得す一旦歸郷開業すへきも五年を期し再び上京更お大に爲すところわらひとア、壯なるかる吾人又刮目して君か他日の雄圖に接するを待たむ

宮嶋健治、松井梅次郎、齋藤幸作の三氏と共に郷裡に歸りて門戸を張り盛に敏腕を振つて四方

患者の需に應せり而も何れも聲聞高く門前常に市をなすとは眞歎吾人は只益々勉めて諸氏か得業士たるの品格と損はさらむことを望むのみ岡部元次郎氏は静岡縣眼科病院(福明館)に聘せらる

へさるゝころなり將に願ぐに時にツアノトを割愛して諸氏の所感を雁信に附せよ尺牘一片諸氏の恩旨に接するに及んては蓋し景慕の念胸襟を衝きて感慨俯仰に堪へざるものあらむ、今や餘寒尙料峭春雨蕭颯の候諸氏夫れ益々加餐せよ

高口保太郎氏は山田止善堂病院醫員に聘せらる

永井源吾氏は大坂病傷生命保險會社に入り

○木村教授の書簡

松本善次郎錄

木下克雄氏は一年志願兵として名古屋聯隊に入

左に昨年十一月廿九日伯林發の書簡中要を摘

營

て登載せん

橋左内氏は郷里福井縣丹生郡織田村に悠々せら

伯林大學外科クリニック概況

同大學外科ク

る

富澤外次郎氏は其後の消息を得ず

お過ぎされは委曲は后便お譲り爰に只た外見上

國分金城氏は郷里小松に歸り父君を助けて診療に就事せらる頃日出澤安村氏と共に陸軍々醫志

願の由

にして手術場は其中央に位す床の陶器様の者にて敷詰め回り三方は階段にて學生の居るべき所

卒業生諸氏の動靜概ね如斯し諸氏永く我校出身の履歷を傳へしむるあらは實に我輩か感謝に堪

なり大凡二百人の入り得可し恰も御地の生理や解剖室と同一、中央の手術を施す場所は横幅二

間興行點線(ヌ、ヌ)迄三間斗なり中央に手術臺
(イ)あり其周圍に○○○(ト)の並列せるは一時
の參觀人若くは御客分の學生即小生の臨床講義
中直立見聞する場所とす其外廓の(チ)の戸棚に
て高さ小生の身長と略同しく其天板は皿杯を置
くに便す、其外廓たる圓形階段(いろは)には
學生の腰掛及机とあり(イ)階段は其前に起立せ
る人(ト)と越へて觀ることを得る故頗る高さも
のなり一般學生は(一)を入り(いろは)の椽の下
階段の裏に外套帽を置き(學生の數も多く學期初
めの第一日杯は數百人の入場者あり其後隨意に
素見者流の入込むこと多きを以て小生の如き新
調の外套杯紛失することありと云ふ故に御客様
連(ハ、九)より入り(ハ、三)を通り(ト)に到たる
なり(二)の階段を昇り手術室に入る者とす席
は各番號を附しありて會計局に於て授業料を納
め其受取書と教授に渡せは教授の席順を記した
る入場券を交付する者とす小生も初め夫れに倣
ひ(其際岡田醫學士の小生を「ベルグマン」氏
に紹介し此人は永く學校教授たりしことを告げ
たるに「ベ」氏は入場券は不用なりとて先に小生
に渡らせし者を取り上げ何きへなりとも勝手に
場所にて傍觀すへしとの事ありし故則ち(ト)の
所より起立せむこととはなりぬ右の爲傍觀には頗
る好都合なきとも毎日二時間しかも午後一時半
に晝飯を喫し壓制的に「ビール」を一本飲まされ
たる上に暖爐の傍ありて恰も巡查の如く起立
するに随分苦數者に御座候
偕て中央に据付けある手術臺は非常な粗末なる
木製の者にて上より見る時はa圖の如くΦΦ印
の足部の下方に折るとを得側方より見ればbの
如く体の上部を高くするを得る者にして米印の
處は一の段を造るか故に今綳帶を施さんとせる
時若くは患者を手術臺上に上げ仰しするに際し

体と手術臺の間に手を送入するに便あり又た手術臺は木板の上厚さは二分斗の硬護謨板を重ね上に護謨布を敷けり手術臺の脚は恰も古下駄の齒の如く減り居るを見る其内には實に何億萬の黴菌を含み居る者にや不潔思ふへし、患者は病室備付の臥床の儘之を車に乗せ此手術室に運ひ來るなり

圖の(ロ)は器械消毒竈を備据る場所にして器械は悉く「ニッケル」鍍金の鑄製盆に盛り之を竈内に納め二%斗の曹達水と以て煮沸し盆の儘手術室内(ニ)の場所に飾れる器械皿の内に入れ上より寒冷なる殺菌水を灌くなり此器械皿は圖の如く篩狀の孔ありて灌きたる冷水は其孔と通り中段の盆に溜る者あり故に器械に附着したる血液等と洗去るに便利あり下段の有噴筒内には常に殺菌水を充たせり、如斯なるか故に器械は始終乾燥状態を保つなり、又器械消毒竈の圖の如く

蓋と有し側面の下部には孔ありて瓦斯と通るか故に隨時煮沸し得るの装置なり

手術室内(ハ)及(ホ)は手洗所(ヘ)は二千倍昇水水を以て手を洗ふの所にして(チ)の戸棚は高さ小生の身長に均しく幅一尺許を隔て、區劃を有し外部は板戸を備へ内には硝子板を以て數段と造り常用の器械並に藥品を納む、手術臺の四隅にある(リ)は天井より懸垂せる大電氣燈にして手洗所側にも尙其他にも所々お電氣燈及瓦斯燈類し、當節「クリニック」の時間は午後二時より四時迄なるか故に雨天なきは手術の始めより大電氣燈を點し居きり

圖中(四)(五)(六)(七)は醫員室等にして(八)は綳帶棚なるも車を裝置しあるか故に用に臨み曳き來るを得、又手術室の天井は醫員室を除くの外凡て硝子張なり

生徒席にの數十數百の生徒皆街道を徒歩し來た

れる儘の靴を以て入り居る事故塵埃の空氣中に存在するは勿論にして棚などは指頭を以て擦るを埃澤山多り加之電燈の光に照すときは諸處に蜘蛛の巢杯懸ると見天井の際に「ランマ」と彫み又「チーフエンバハ」氏の義布斯像を飾る等實に複雑ある此室内は到底清潔を望むに難かるへし

如斯手術場に於て腹壁截開「ヘルニオトミー」、切斷術等凡ての防腐的手術を施し來るも今日迄余か目撃せる處にて多し第一癒合を營み其成績佳良なるに一驚を喫し候

前述の如く器械は(チ)ノ戸棚内にありて不潔ありと雖使用前には悉く2%ノ曹達水を以て煮沸するの例にして槌の如き木製の者と雖敢て異なることなし、又手術中膿竈に逢ひ膿汁の附着せる刀の如きは直ちに之を洗ひ竈内に投して煮沸するなり斯の如く不絶器械の煮沸をなすと雖毎

に光澤を失ふことなし(ニッケル渡金セリ)

手ノ石鹼と二千倍昇汞水にて能く洗ひB氏自ら手術中何回と多く此昇汞水を以て洗ふ、手術部ノ毎常石鹼と刷子と以て洗ひ布綿を以て拭ひ去るのみにして敢て水と濯漑せず時々酒精と以て拭ひ若し不潔なる瘻管ある時は依的兒を以て拭ひたる后酒精と以て拭ひ更に石鹼を塗り昇汞水と浸せる布巾を以て拭ふを法とせ、石炭酸は「キヨールニヒ」氏に手術室には備へあるもB氏は之れを用ゐざるなり

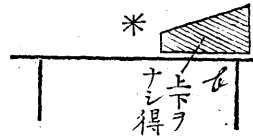
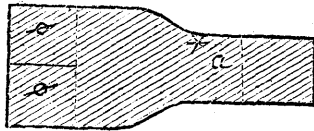
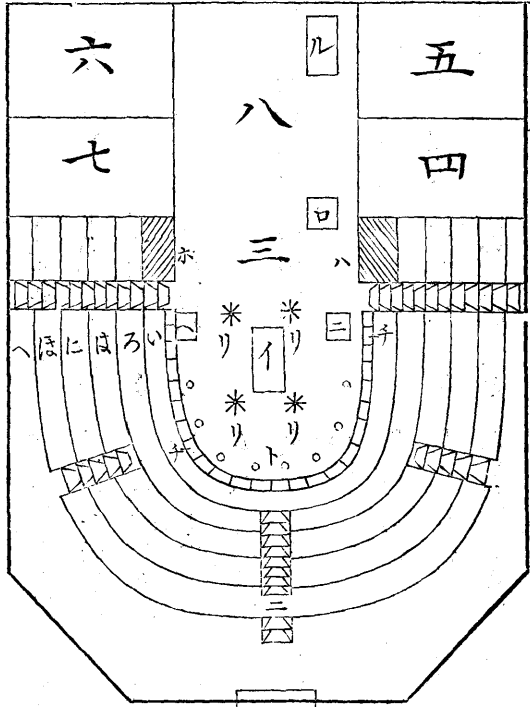
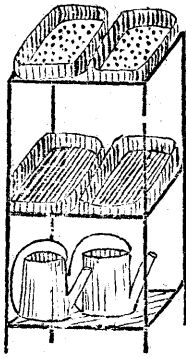
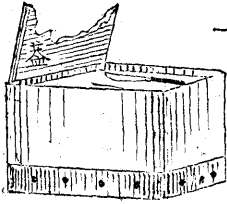
繃帯には悉く乾燥せる殺菌ガーゼを用ひ只結核或は化膿ある部には少許の沃仿ガーゼを以て柔く充填し殺菌ガーゼを以て被ふなり又其上は殺菌綿を以て僅に被覆せるを止めアマニン紙の類の之を用ゑす(乾燥を力むる爲なり)綿の上は殺菌せる木綿帯と以て纏絡す屢上巻きには糊繃帯と用ゆるを見る綿を用ふるは單に詰め物の目的

に出づるか如く敢て黴菌を濾過すると云ふか如き特殊の理由あるにあらざる者の如し故に「ガ―セ」上綿を以て被ひれざる部位を見ると間々あり、凡て繃帯を施すに際しての大壓迫を忌み腐骨術後の如きも骨腔洞内より柔く沃仿ガ―セを充填し殺菌ガ―セにて被ひ強き壓迫を與へずして繃帯を施し、安靜の目的を以て厚さ二分斗の厚紙を以て幅一寸斗の副夾を造り之を貼するを見る如斯あるも敢て術後甚き出血と起すことなし、凡て創面には濕氣と帶ふることを嫌忌しイルリガートルは勿論用ふる事なく決して創面を洗滌せず創面を械ふにも乾燥せる殺菌ガ―セのみを用ゆるかり縦令腐敗性蜂窠織炎の如き創腔内より膿液溢流する者と雖乾燥ガ―セを以て拭ひ更に「ガ―セ」を交換して充たすに止まれり凡て温氣の存する處に黴菌蕃殖し「イルリガートル」を以て洗ふか如きは黴菌をして組織

内に押し込む者と謂ふへしとは同氏の持論なり右の如くなるか故に創面を拭ふ爲めは殺菌せる一尺斗の「ガ―セ」を用ゆるを見る麻酔には悉く「クロ、ホルム」を用ゆれども只一回エーテル麻酔を目撃せり之を用たる患者は蜜尿病家として糖量の増すを恐てなりと（該病を患へざる者も於てもクロ、ホルムを爲尿中糖分と出すとあるか故に此患者に於ては依的兒を擇ひしなりと）其用法に「エスマルク」の「コルプ」を以て鼻口を被ひ「コルプ」上より「クロ、ホルム」を滴下し居るなり此滴下の餘り感心せず此「コルプ」には「ガ―セ」を附し毎回清潔なる者を用ふるか爲取外しを容易き様に製しあるなり今手術を施さんとするに當ては先づ術者は手術臺の側より對して立ち主介者之に對し副介者は術者の側より起立し患者の頭邊には未だ大學を卒業せる尙は「ドクトル」の稱號を得ざる見習生一

ダース半斗蜻集して麻酔掛をなせり此輩は見習者となり一年を経されは開業試験を受くると能はざる者の由にて無暗に患者の下顎を押し術后二週間も飯否パンを喰ひ得ぬ様ある事を仕出かす先生故患者呼吸困難に陥り吸氣時鎖骨上窩、季助部の凹陷するに至るも一向平氣にてチョン々々々〔クロ、ホルム〕を滴下し居る杯傍に見る者をして手より汗と握りしむるとあり、又術者の後には醫者にあらされども器械等を出し入れなし其他手傳をなす者起立し其傍には機械掛の婦人あり能く熟達せる者にして手術中入用の器械に必ずしも未だ命令の下らざるに先ち捧くると見受たり、此器械掛の對側に布巾掛ありて手術中術者若くは介者の默然手を出すを見は直ちに布巾(テウツベル)を渡すを常とす、器械掛の傍には器械台、布巾掛の傍には布巾入を備へあるあり、又見習生に對し術者と介者の間に患者を固定せるか爲別に介者ありて起立し毎も見物の邪魔者となる、其他小使一名ありて昇永水と盛りたる器を運び術者の手を洗ふに便し又た副夾と持來る等諸般の雜用を司れり、止血、縫合、綑帶はB、氏自ら之をなすともあれども又手術室の圖中(八)の場所に運び介者之と終るともありとす目今主なる介者はキョーニヒ氏とて彼の有名なるケエーニヒ氏の子息あり、切斷後其他「アセプチニ」の創なきは綑帶交換は一週日以上の後初めて行ふものにして其際は剪刀を以て綑帶を切り離し創面を視察したる後直ち殺菌「ガーゼ」を以て被ひ軽く綑帶するのみおして前述の如く洗滌は決して行はず故に膿盆を要せずとす、手術中患者及手術台を被ふは恰も西洋料理店に於て用ふる前垂の如き者を以て既に殺菌しあるか故に之を以て石鹼を塗りたる所、手術台上の護謨布をも拭ひ申候、又た患者及手

九 路 通 夕 行 へ 病 室



術台上一面に之を以て被ひあるか故に器械は何
きの場處に置くも危嶮なり如斯布片は毎患者に

於て切斷せされり効るきも該患者の如きは「ヒ
ロコッフ」法を以て足れるの思をなせり

對一少くも六七枚を要し候綑帶交換に際し創内
に爹兒様の血液滯溜せるときは之を流出せしめ
D管又は「ガーゼ」を送入す、術後の止血は至極
叮嚀になす處大賛成あり又驅血帶を用ゐず只暫
時患肢を舉上し護謨管を以て巻くに止まれり又
上膊を巻くに於て彼の小生も實檢せる如く神經麻
痺を恐るゝか故に已に護謨帶を以て巻き居れり
諸小生か御客分たる學生として今日迄に傍觀せ
る手術と舉ぐれば

第四、足蹠に存せる鶏卵大の黒色素性肉腫に下
脚中下三分一界部切斷術と施（此診斷の誤謬な
らん腫腫物の有莖茸状をなし表面に於て暗藍色
及黒色を呈せる部分ありと雖余か唱道する彼の
肉芽腫と全く異なるとなく四五日の後其顯微鏡
的標本を示されB氏の「アルウエオラー、パウ
なりと稱せられしも毫も可然處を見ると能はず
して全く肉芽組織と鏡下に檢せし時と異ならず
りし、又余は常に如斯黒色素性肉腫患者に手術
を施こさんと欲するときには先づ前驅的に鼠蹊腺
の摘出を試み既而腺内に黒色素と含有する時は
切斷術の徒勞なるを悟れり、之れ固より各自の
見る所に任すへりと雖縱令仮に該腫物を以て肉
腫と見做すも既に六十以上の老人あるか故に疼
痛を去り歩行となし得るに至れば満足なる者お

第一、上膊骨下端中心性骨肉腫に肩胛關節の離
斷術と施

第二、X脚に大腿骨下部切斷術

第三、蜜尿病者（五十才）の第二及三趾の壞疽及
足脊蜂窠織炎に大腿切斷術（小生の常に唱ふる
如く凍傷性及老人性の足趾壞疽は可及的上部に

痛を去り歩行となし得るに至れば満足なる者お

して敢て切斷(下脚)術を要せず實に「ヒロコフ」法を施せば足るの感ありし)

第五、乳癌摘出

第六、陰莖癌に切斷術を施せり該腫物は既に陰莖根に達したるを以て陰囊を兩半し根部を露出して切斷せり

第七、腕關節の回前位強直兼蜂窠織炎(手背に軽度の)ふ前膊切斷、(該患者の總指は強直せしも拇指は尙自動を得し者にして縱令時日を費せ

へしと雖充分保存的療法を以て治療し得へき者と考られたり)

第八、脛骨体下部の腐骨術(骨櫃の除去方は余か除くよりも少なかりし隨分鑿の用ひ方は劇しきも骨折を招かすして速かに充分骨櫃を鬪くの點は感心せり骨腔内ふ充填せる沃度仿謨ガーゼは都合良ければ二週間計を置くこと云ふ)

第九、上膊骨線上横骨折より骨折端を正復し固定

縛帶を施す此際此部骨折の種類、脱臼との鑑別と述へられしか小生の「ボリクリニック」に於て述るふ比すれば先づ半分計の講演なりし

第十、左右潜伏墨丸の癌腫摘出

第十一、肝臟「エヒノコックス」二時的切開術に施すに初め腹壁のみを切開し沃仿ガーゼを充填し後九日計を経て囊を開き「ガーゼ」及D管挿入をなせり此症に於て試験的穿刺術を行ふことを大

み戒みり

第十二、足關節部の銃創にして他醫既に距骨及兩下脚骨の下端を切除したる者にして腐敗甚しく高熱あり創内及創縁に於て壞死部ありて惡臭甚しく膿液は滴々下床上に點瀝し腐敗液を以て染たるガーゼ亦所々に放棄せらるる許なりしか腐骨片を摘み出し布片を以て創内を拭ひ沃度仿ガーゼを充填したるのみにて切斷を企てられざりしか爾後高熱去らず斷絶ガーゼ義布斯帶と施

たる儘にて保存的療法を攝られたり（斯の如きせる乳腺等に就ての注意杯を聽かさりしは遺憾
の縦合腐敗去り治癒を得るとあるも脛腓骨の下あり）

端の腐骨が陥り居るか故に治後下脚の無用の荷物たるに過ぎざるへく寧ろ速に切斷するの勝れ
第十七 右腋窩及鎖骨上窩水脈腺結核の摘出に
るゝ覺へたり）
して曰く鎖骨上窩の水脈腺内への屢色素を含有
せることあり之れ畢竟肺より來りたる炭末に外
るらをと此に摘出せる腺は中央に於て結核乾酪

第十三 小兒の頸部及腋窩水脈腺結核にして其
部が許多の水脈腺腫脹あるを認めしか僅に四五
を藏し皮質は暗黒色の色素を沈着せり（若し果
箇の腺摘出を施こされたる而已（該患者は恐く
して黒色素腫を發見せざる場合よ於て腋下或は
は早晩全身感染を免かれざるへい）
鼠蹊腺内へ色素を含有せることなき者なるか否

第十四 顎下水脈腺結核（二十才計の者）の摘出
は他日の檢索を待たざるへかゝす）

よして該患者は外部より三四箇の水脈腺腫起を
第十八 股關節結核にして切除術を施せる後數
觸れたる而已にして瘻管をも存せる者（なり）
回破潰せる症にして其瘻管の搔爬せり

か故に摘出を試むるは賛成なり）
第十九 肩胛棘基底部の軟骨瘤（指頭大）切除

第十五 膝關節屈曲強直の切除術にして膝蓋骨
第二十 ラヒチスに由る〇脚に脛腓骨切斷

を地平を鋸斷せられたり然るゝ大腿骨腓内を陳
第二十一 多發性骨膜骨髓炎患者の化膿部切開

舊結核竈を發見せり
第二十二 陰囊水腫手術にしてB氏法を施し全く

第十六 左胸壁（大胸筋縁）の脂肪瘤摘出（逃走
莖膜を切除せり

第廿三 外鼠蹊(腸、大綱)ヘルニア根治手術に
して「コツヘル」氏法を施し他の一「ヘルニナト
ミー」術式と略述せられたり

第廿四 脛骨後雜骨折に假綑帶と施せしモX光
線に照らし檢するに未だ正復せざりしを發見せ
り故に切開骨縫合と行へるなり

數日を經は更に此光線を籍り治癒機能の正當な
るや否やを檢せしと述へらる又此手術に際し
Drahtgasseを用ひたり術中切れ易き故に數條
の用意を要すへし又錐は「ロールマツシーネ」に
付し電氣装置と以て自軸回轉を營む者を用らる
第廿五 脛骨腐骨手術

其他ヘルニオトミー術后れ者、切斷術后人工肢
を裝て良く歩行し得る者、術後患者乃綑帶交換
等は毎日別に一二ヲ示さるゝあり

以上は十一月一日より同二十日迄の間に於て目
撃せる手術の概畧を記載せる所よしてB氏クリ

ニツクは一週内五日間毎日午後二時より四時迄
の規定にして授業料ハ此學期内は四十マルクな
り學生は百名以上ありて午後二時十五分乃至二
十五分迄に出頭し患者一名に就き學生一名宛を
呼出し極疎く診斷及治法を尋ぬ此「プラクチカ
ント」を希望する者は別々納金を要する由わて
爲に學生ハ悉く此資格を有せにあらそ此尋問を
なす序に「エヒノコックス」の發育、骨折の診斷、
手術方式等種々乃講演を聽きしか區別診斷等概
して非常に粗漏にして小生ハ「クリニツク」に於
て述ふる所に比すれば遙に粗あり學生の手術傍
觀を必ずや既に記載せるか如くなるを以て階段
最下列一部ハ學生及見習生等れ如き直立せる者
ハ少しく刀の運轉等をも見るを得へしと雖其他
の學生ハ術者、介者等の蔭となり到底觀得るこ
と能はざるへく生徒中雙眼鏡と携ふる者さハ數
多あり手術傍觀とは名計りにて書籍、新聞と閱

するあり集會の回章杯を回はす者あり眠るあり
て見るに忍びを實に日本の學生は幸福なりと思
はれば候

B氏の手術は大に巧なりとは兼て聞及居りし處
にして腐骨術お際一大なる鑿と以て強力を用ひ
骨櫃を刎起その御手際、四肢切斷術杯は隨分立
派なれども「ヘルニオトミー」等凡て緻密なる手
術は左程にも感心せず有溝消息子は用ると稀に
して只囊腫に剝離をゐす時の如き之を用ゆるの
み、縫合の結節縫合を擇ひ術後多少實質的出血
を來すへき者例の陰部の手術などには縫合は際
一小部を残して流出乃途とゐせり縫合糸は絹糸
を用ひ脈管結紮に腸線を用ゆ、凡て綳帶を施
せる部分は運動を制せざる時は綳帶弛緩の爲空
氣進入して化膿の最多き原因となると稱し厚紙
副夾を貼して施術部を固定す又下肢に用ふるに
便利なる副夾は平板の膝脛に當る部の側縁より

削り去つて細くなり下脚部は下端は二箇の小桿
となれる者にして別に足板を附する乃裝置なり
足板は一狭側縁より二箇の小桿突出し尖端に金
屬環を有せ此環中に下脚部の二桿を挿入して螺
定する時は一直角副夾となるを得る者を用ゆ
病床日誌の稍粗漏にして之を金澤病院外科部の
病床日誌に比せれり精一とは謂ふ能はそ
又手、小生は外科「クリニク」の外病理教室の
講義を聽き「ウイルヒョー」氏乃「ラボラトリウ
ム」に入り込み仕事をゐり居り候か此事又關す
る記載は後便と期候云々

